

アイヌ

アイヌは、先住民族で、その伝統的な居住地には日本列島の北海道と本州北部、そして南樺太（サハリン）と千島列島が含まれます。伝統的にアイヌは狩猟、採集および漁獲により生活し、食生活を補うために粟などの耐寒性の穀物を栽培していました。彼らは北海道から日本の本州、アムール川下流域や更に北のオホーツク海周辺地域との交易を行っていました。

アイヌの世界観は、自然との密接な関係性と自然への依存によって形作られています。アイヌは、生き物や自然の要素、さらには人工物にも「カムイ」として知られる精霊神が宿っていると信じています。これらのカムイは崇拜の対象であり日常生活における積極的な参加者とみなされており、肉や毛皮などの恵みをもたらす一方で、自然災害ももたらすと考えられています。

20 世紀初頭、政府はアイヌを日本社会に同化させるための政策を制定しました。人々は日本名を与えられ、伝統的な狩猟や漁場への立ち入りを禁じられ、母語の使用も制限されました。しかし、アイヌの歴史、信仰、文化的アイデンティティは、工芸品、儀式、物語や叙事詩の豊かな口承伝統を通じて生き延びてきました。

19 世紀後半から、北海道に和人（民族的日本人）の入植が増加するにつれて、アイヌの

生活様式は大きく変化しました。狩猟や漁労などの伝統的なアイヌの慣行は制限され、アイヌの子どもたちは日本語だけで教育されるようになりました。それにもかかわらず、アイヌの歴史、信仰、文化的アイデンティティは、工芸品、儀式、そして物語や叙事詩の豊かな口承伝統を通じて生き残りました。今日、アイヌの遺産は、教育、現代美術、音楽、儀式、そして世界中の先住民族との文化交流を通じて保存され、再活性化されています。